

# 若干の回顧

和田 健 夫

この度私の名誉教授記念号の刊行にあたり多くの方々のお手を煩わせました。編集に携わった教職員の方々、寄稿頂いた先生方、巻頭文執筆に悩まされたであろう穴沢眞学長先生、皆様に深く感謝申し上げます。

私が小樽商科大学に職を得たのは1980年(昭和55年)4月のことであります。振り返ってみますと、私が商大で働いた40年の間には様々な出来事がありました。

ご存じのように、80年代は日本がまだ安定的に経済成長を続け、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と称えられた絶頂期でした。18歳人口も潤沢で、大学は淡々と入学者選抜を行い社会に卒業生を送り出していました。若い教員は自分の研究のことばかり考え、論文を生産することに精魂を傾ける毎日でした。懐かしく思い出されます。

膨れ上がった日本経済は90年代には遂に破裂し(「バブルの崩壊」)、これ以来日本経済は、経済成長の鈍化、少子高齢化、財政赤字等との課題を抱える苦難の時代に突入(「失われた10年・20年」)、現在に至っています。バブル崩壊のとき経営不振に陥った企業が採用を控えたため、多くの大学卒業生が職に就くことができず辛い目に遭ったことは(「就職氷河期」)記憶に新しいところです。

失われた10年・20年の間に社会ではグローバル化とデジタル化が大きく進展しました。21世紀に入りその度合いは益々強くなり、経済構造や社会のありかたを変化させつつあります。2008年の金融危機は、一国での出来事が瞬時に世界中に拡大し危機をもたらすという、グローバル化・デジタル化の現実を人々

に見せつけた出来事でした。

日本社会が多くの課題を抱えるなか、高等教育に社会の関心が向けられるようになってきました。日本の大学が、現在進行している社会の変化に対応できるように、さらには、未来を切り拓く新しい科学技術の振興や人材育成に一層貢献できるように、高等教育のありかたを見直すべく、90年代の終わりから2000年初頭にかけて大学改革（とくに国立大学改革）の顕著な動きが起きました。1998年（平成10年）10月に出された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」がいわばその出発点でした。「21世紀答申」と呼ばれるこの文書には、その後続く様々な改革の方向性が示されていました。

私は丁度その頃、2000年（平成12年）7月に学生部長（この職は翌年の3月に廃止されたため在任期間9ヶ月、最後の学生部長となりました）に就任し、それ以来、図らずも、大学改革という大きな流れのなかで小樽商科大学の運営に携わることになりました。2004年（平成16年）の国立大学法人化は歴史に残る大改革でした。国立大学を国家組織から切り離し、国の財政支援と自己収入を基礎に、評価に基づいて自主・自律的な大学運営を行う体制が整えられました。しかし、現実には、国からの基礎的な財政支援（運営費交付金）が毎年度減額されるだけでなく、その配分方針も何度か変更・修正がなされたため、本学のような財政的基盤が強い国立大学は、財源の見通しが立たず、将来構想を考えるのに大変苦労いたしました。この数年は、少子化の進行（今に始まった問題ではないのですが）、競争的環境の拡大、国家予算の逼迫など、我が国の高等教育をめぐる状況は一段と厳しくなりつつあります。学長職第二期目の2018年（平成30年）5月には、帯広畜産大学、北見工業大学との間で法人統合（2022年発足）に踏み切りました。

大学経営に関わった19年9ヶ月の間、理事・副学長はじめ、多くの教職員の方々に助けていただきました。改めてお礼申し上げます。

2011年（平成23年）7月、小樽商科大学の創立百周年に立ち会うことができ

たのは忘れられない出来事でした。その時、私は総務担当理事・副学長として百年史の編纂に関わりました。2011年に小樽商科大学出版会から刊行された1,000頁を超える『小樽商科大学百年史（通史編）』には、創立以来の伝統を見失わず、時代の変化や要請に臨機応変の改革を実行してきた大学・教職員・学生の姿が詳細に描かれています。百周年は小樽商科大学の立ち位置と将来を展望する機会となりました。

他方で、私が大学運営に携わった期間には、大雨・台風・地震・ウイルス等による天災・災厄被害、事故が相次ぎ、学内でリスクへの関心が高まりました。震度7級の地震が4度発生、そのなかでも津波による原発事故を引き起こした2011年3月の東日本大震災は、最先端の科学技術でも制御が困難なリスク、人間の意思決定が生み出すリスクの存在を人々に知らしめました。災害は、経済的な損害だけでなく人々の行動様式、さらには社会の在り方にも影響を与えることも学びました。そして、2012年（平成24年）5月に学内で起こった未成年学生の飲酒死亡事故です。大変なショックでした。学長の元に教職員が文字通り一丸となって解決に当たったことを思い出します。

最近では、2018年（平成30年）9月に北海道を襲った胆振東部地震、私が学長職を辞する直前に発生し全世界を震撼させた新型コロナ・ウイルス感染があります。この2件は、教育の現場で起こりうる深刻なリスクや対応への意識を自覚させました。

教育と研究の方ですが、副学長時代までは、何とか続けました。しかしそれらは不完全・不十分なもので、大学には貢献できなかったと思いますが、私自身にとっては意義あることでした。

私の専攻分野でもあり、学部・大学院で担当した「経済法」は、最終講義でもお話いたしました。小樽商科大学では古くから開講されてきた由緒ある科目で、私は、小原喜雄先生の後を継ぐ2代目の専任教員となりました。大変光栄であり誇りに思っております。

講義は、副学長の途中から免除していただきましたが、「研究指導（ゼミ）」は副学長退任まで担当しました。私のゼミは、一回の募集で集まることも希にありましたが、たいていは第三次募集まで行うゼミ、他学科の学生が多く、ゼミに所属する意欲の乏しい、あるいはゼミ専攻で落とされ行き場のない男女学生も必ずいるという雑多性、よく言えば多様性が特徴でした。そのようなゼミでしたが、今では、OB・OGの諸君は各分野で活躍し、その中には、公正取引委員会の職員、独禁法専門の弁護士、研究者になった者もおります。

大学院での修行時代から今日まで研究者としての私は、結局中途半端な状態のままで一覚悟の上でしたので後悔はしておりませんが—大学を去りました。副学長時代までは、論文等書いておりました。ただし、すべて依頼によるもので生産性にやや欠けています。それでも執筆している間は大変楽しい時間を過ごすことができました。また学長在任中の2016年10月に、私の所属する2つの学会（日本経済法学会、日本国際経済法学会）を小樽商科大学で連日開催できたことは身に余る幸運でした。これから自分の研究を取り戻すことができるでしょうか。挑戦するつもりです。

退職して自由な時間が戻ると、時々、自分は一体何者か、という思いに襲われることがあります。ゴーギャンの絵ではありませんが、どこから来たのか、どこへ行くのか、自問しても答えがみつかりません。最近知り合った浄土真宗の僧の方にそのことを話したところ、それでいいと言うことでした。

未だコロナ禍の直中、教職員・学生の方々の心労如何ばかりか、お察しいたします。小樽商科大学の益々の発展を祈念しております。